

『アキラの地雷博物館と こどもたち』

— NEW CROWN Book 2 Let's Read 2 原作本
編集部

●元少年兵が語る数奇な運命

「アキラ、畑の地雷を掘ってくれ」「こどもが不発弾で遊んでいる!」。農民の依頼を受けて、無償で駆けつけるアキ・ラー（通称アキラ、カンボジア人）は、棒1本で地雷を掘ることができるエキスパートです。

この本は、アキラの数奇な半生記と、地雷被害者（アキラが養育している子どもたち）の作文で構成。

アキラは5歳でボル・ポト軍に両親（教師）を殺され、兵士として訓練されます。玩具は地雷とAK（自動小銃）。持ち前の才覚で、過酷な飢えも殺戮も生き抜いていく様子や、地雷をまたぐ利口なクマの話などのおもしろいエピソードが紹介されています。

「今でも狩りをしてジャングルで寝るときが一番安心。夜でも目が見える、獣の声も聞き分けられる」というアキラがジャングルを出たのは20歳のときでした。国連軍に入って世界中の人と出会い、初めて学校に行って文字を習うという新鮮な喜びのなかで、アキラは自発的に地雷処理を始めます。そして最後の1個まで地雷を掘ろうと決意します。

“I want to make my country safe for my people.”

●心揺さぶる平和の発信基地

「アキラの地雷博物館」がアンコールワットの近くにオープンしたのは1999年。旅行ガイドで貯めたお金で地雷だらけの土地を買い、処理し、小屋を建て、無料の博物館（兼自宅）を建てます。

小屋の内外にぎっしりと地雷を並べ（レイアウトも美しく!）、小型地雷は文鎮に、大型地雷は椅子にとリサイクルし、入り口にはUSAと刻印のある不発弾を立てました（ベトナム戦争時に米軍が落とした大量の不発弾が子どもに被害を及ぼしています）。

地雷博物館には世界中の若者が訪れます。地雷を



『アキラの地雷博物館とこどもたち』
アキ・ラー [編著] 三省堂

前にしてじっと考え込む人、涙を浮かべながらノートに書き込みをする人、それぞれに深い思いを抱えて国に帰って行きます。傍らでは、片足の子どもがケンケンしながら犬と戯れていたたり、家畜の世話をしていたり、ご飯を食べていたり…。

ここは、戦争中に地雷を埋めた少年兵（アキラ）と、地雷で手足を失った子どもたちが、本物の地雷と共に暮らす、“生きた博物館”なのです。

●誇り高く生きることを伝えるヒーロー

アキラは英語を流暢に話し、日本語・仏語・韓国語・ベトナム語等も話せますが、辞書もノートも使いません。時には手の平に文字を書いて、外国人から直接覚えたそうです。

文字も知らなかった少年兵が、サバイバーとして社会復帰し、迫害や中傷にもめげずに平和活動続けている例は、世界的にも極めて稀です。

アキラは、人生はいつでもやり直しができるんだよと教えてくれているようです。子どもたちの写真の笑顔にも、誇り高く生きる喜びがあふれています。

●地雷博物館とアキラの現在

地雷博物館はバンテアスレイの近くに移転し、欧米NGOの支援で立派な施設に。アキラは館長をしながら念願の地雷処理団体を立ちあげ、先頭に立って地雷処理にあたっています。

（サイト名: The Cambodia Landmine Museum, <http://www.cambodialandminemuseum.org/menu.html>）

また、アキラは2010年、CNNの世界の十大ヒーローのひとりに選ばれました。

（本書を原作とした漫画『ジャングルボーイ・密林少年』（画・深谷陽、集英社）があります。）